

リカードウにおける一般的交換媒介物について

吹春, 寛一

<https://doi.org/10.15017/4362549>

出版情報：経済學研究. 28 (2), pp.59-90, 1962-06-25. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：



リカードウにおける一般的交換媒介物について

吹 春 寛 一

一

古典学派では一般に貨幣の別表現として、一般的交換媒介物 (general medium of exchange, circulating medium) なる用語法がなされているが、同一用語を使用していても、その内容は必ずしも同一ではない。私はここで、リカードウのいう一般的交換媒介物の意義をたどることによって、この言葉をどのような意味に使用しているかを検討し、通常数量説といわれる彼の貨幣論についての一つの解釈を試みたい。

貨幣(金)の価値が一般商品と同じく、投下労働量によって決まるということは、貨幣が一個の商品であることの証左であるが、貨幣価値論を問題とする場合には、それだけではすまされない。一般にリカードウ貨幣論が数量説であるといわれる場合にも、彼は金(商品として)の価値については労働価値説を主張したことを認めながら、貨幣価値については数量説を主張したといわれる。貨幣は特殊の商品であるために独自の機能・運動法則をとるのであるが、まずわれわれは、彼が貨幣の独自性をどのように理解していたのか、したがってその機能・運動法則をどう理解していたかを検討したい。その上で貨幣論における労働価値説の貫徹をどう理解していたかを吟味する。

貨幣の法則性の把握は、まず貨幣の価値尺度機能をどのように理解していたかにかかっている。というのは貨幣の流通必要量の把握は価値尺度機能の当然の帰結であり、また退蔵貨幣の問題は必要量法則の理解なくしては展開できないものだからである。逆にいえば、価値尺度という言葉を使っても、それをどう理解しているかということは、流通必要量規定や蓄蔵貨幣の展開過程で検証されてくることになる。ここではまずリカードウの「一般的」という用語の性格をヨリ明確にするために、頭初マルサスとの対比のうちに述べてみたい。

二

マルサスの場合もリカードウの場合も、価格が貴金屬によつて表現された商品の相対価値であることには相違はない。しかしながら価格の変化という点になると、彼等の間には見解の相違が生じてくる。

マルサスは「商品の貨幣での騰落は、内在的原因から生ずる変動以外の変動は指示し得ない」⁽¹⁾といいながらも、他方では、地代の原因として貨幣の価値下落をあげている (ibid. p. 162 吉田訳 (上) 三二一―三二三ページ)。ここでは貨幣価値の下落のために、利潤、労賃は下落することなしに地代のみが騰貴するという。また別の箇所では「貴金屬の価値下落を弁別する標識は、加工商品の価格の一般的騰貴を伴なわざる、穀物、原料生産物及び労働の貨幣価格の騰貴である。」 (ibid. p. 126 吉田訳 (上) 二三八ページ) という。同様に労賃、利潤の問題にしても混乱はあるが、マルサスによれば、貨幣価値の変動は、すべての商品に対してではなく、ある種の商品、ないしある種の階級の分配にのみ影響することになるのである。これらの点については、リカードウがしばしば困惑して「マルサスへのノート」の中で反駁しているところである。

(1) T. R. Malhus: Principles of Political Economy. N. Y., 1951, p. 60 吉田秀夫訳「マルサス経済学原理」(岩波文庫版)

(上) 九八ページ。傍点は原文イタリック体。以下別に断わらない限り、傍点は引用者のものである。

さきの地代の原因としての貨幣の価値変化について、リカードウは次のように注記している。「如何にして貨幣の価値に何らかの下落が起ることになるのかは私にはわからないが、しかし私は、マルサス氏が、私が単に商品の価格の騰貴と呼びうるにすぎぬそれを、貨幣の価値の下落と呼ぶであろうと信ずる。穀物の価格のあらゆる騰貴を、彼は貨幣の価値下落と呼んでいる。たとえ貨幣が正確に以前と同一分量のあらゆる他の商品と交換されていようとも——私はそれを貨幣価値には少しの変動もなき穀物価格の騰貴と呼びたい。貨幣は思うに、それがヨリ少ない一つの物や二つの物や一ダースの物と交換される時ではなく、ヨリ少ないすべての物と交換される時にのみ、価値において下落するものである。一商品の価値の騰貴と価値を測定する媒介物の下落との間には、顕著な相違があるのであるが、マルサス氏の用語にはこれに対する用意がない。」⁽²⁾「貨幣が今価値において下落すると仮定すれば、ただに諸商品のみならず、穀物もまた価格騰貴するであろう。しかし一方における穀物の騰貴は他方におけるそれとは全く無関係である。一方の騰貴は生産の困難によるものであり、穀物及び農業生産物に限られるが、他方は貨幣の価値下落によるものであり、そしてすべての商品に共通である。」(vol. II, p. 149 吉田訳(上)三二八ページ)

(2) D. Ricardo; The Works and Correspondence of David Ricardo, edited by P. Sraffa. vol. II, p. 144 吉田訳(上)三二三—三二四ページ。以下本全集は巻数及びページ数のみを記す。

価格は貨幣で表現された一商品の交換価値であるから、その価格はまず二つの原因によって変化する。第一は、商品それ自体の価値変化にもとづくものであり、その商品の価格のみがその商品の価値変化に比例して変化する。第二は貨幣(金)の価値変化にもとづくものであり、その価値変化に逆比例して、すべての商品の価格が影響を蒙るのである。

る。何故ならば、価格という関係において、貨幣商品はすべての商品と同時に関係を結んでおり、A商品と貨幣との関係の変化は、もしそれが貨幣側の変化にもとづくものであれば、同時にB商品、C商品との関係においても変化していることを意味しているからである。これは貨幣という「一般的」交換媒介物のもつ特殊性に依るものである。

リカードウは一八一六年十月五日付の私信において、マルサス宛に次のように書いている。「価格と価値とに関する私の以前の観念は正確な観念ではありませんでしたので、昨今私はこの問題で時間を奪っています。」そして一八一七年に出した『諸原理』では次のように説明している。「交換価値及び価格を左右する諸原理を述べるにあたっては、我々は注意して商品そのものに属する変動と、価値を測定し、または価格を表現する媒介物の変動によってひき起こされた変動とを区別しなければならぬ。」(vol. I, p. 48 小泉信三訳「経済学及び課税の原理」(岩波文庫版)(上)五二ページ)「商品の価格が永続的に騰貴しうるのは、これを生産するのにヨリ大なる資本及び労働量を使用せねばならぬためか、あるいは貨幣の価値が下落したためか、いずれかに限る。また反対に、その価格が下落し得るのは、これを生産するのにヨリ少なき資本及び労働量が使用されるためか、あるいは貨幣の価値が騰貴したためかに限る。この二者択一の後者、すなわち貨幣価値の変動から起る変化は、同時に一切の商品に共通なものであるが、前の原因から起る変化は、その生産に多きまたは少なき労働を要する特定の商品に限られる。」(vol. I, p. 417 小泉訳(下)一六六ページ)

(3)

貨幣の価値変化はすべての商品にひとしく作用し、したがって彼は、これが労賃、利潤及び地代の分配率には影響しないと主張するのであるが、これは「課税が何ら行なわれていない国において」という限定詞のもとに認められる。彼は「物価が課税によって人為的に引き上げられている国では、流入による貨幣の豊富もしくは外国需要による貨幣の輸出及びその結果たる貨幣の欠乏は、一切商品の価格に同じ比例においては影響せぬであろう」(vol. I, p. 209 小泉訳(上)二二七ページ)といっているが、その理由は主要次の如きものである。無税である商品は貨幣の価値変動によって、それと逆比例的に価格騰貴する

ので、利潤率は不変である。他方課税された商品は、その価格が貨幣価値變動に逆比例して騰貴するのみならず、更に課税のために騰貴する。その騰貴率は無税の商品よりも大であり、利潤は普通水準以上を獲得している。そして平均利潤が回復されるまでは、当該産業部門へ資本が流入し、ヨリ大なる資本が投下されるので、商品相互の相対価格が變動することになるのである。したがって課税されている状態のもとにあっては、「原因の如何を問わず、とに角貨幣の価値が騰貴したならば、それは諸商品の価格に同じ比例をもっては影響せぬであらう。」(vol. I, p. 208 小泉訳(上)二六ページ)この点について、彼は、いまだかつて誰も言及しなかった事であり、かつ重要な原則であるとして自信をもって述べている。当時イングランド銀行の兌換停止期間における物価變動について、それが紙幣の過剰発行——通貨価値下落にもとづくものであったならば、すべての商品が同じ比例をもって騰貴しなければならなかった筈であるという主張が唱えられた。これに対して、リカードウは、右に述べたように、課税がなされている国においては、通貨価値の變動はすべての商品に同じ比例をもって影響するものではないと反論している(vol. I, pp. 209~210, 小泉訳(上)二一七~二一八ページ)。

一般的交換媒介物は貴金屬であり、この貴金屬を生産する為には、一定の資本と労働を必要とする。換言すれば、一般商品と同じく価値実体をもった一商品である。彼が「不変の」価値尺度論において終生困惑したのは、貴金屬も一商品である以上、その価値は可変であり、この可変なる商品が価値尺度機能をいとなみうるか否か、ということであった。解答は否定的であり、ために、「完全なる」尺度は放棄するに至ったが、それでも尚、一般商品と共通な価値実体を有するものでなければ、価値尺度となりえず、また貨幣たり得ないというのがその主張であった。貨幣(金)も一定量の資本と労働のもとに生産されるものであることを、彼は、鉱山地代論において次のような形で述べている。「探掘鉱山中の最も劣等なるものから生産せられた金屬といえども、少なくともただにこれを探掘し、生産物を市場に搬出することに従事する者が消費する衣服、食物及び他の必需品一切を獲得するのみに止まらず、更にこの企業を経営するに必要な資本を前払いする者に、通常普通の利潤をも提供するに足るだけの交換価値を持たなければならぬ。地代を納め

ぬ最貧鉱が生ずる資本収益は、他の生産力優れるすべての鉱山の地代を左右するであろう。この鉱山は資本の通常利潤を生ずるものとせられている。」(vol. I, p. 85, 小泉訳(上) 七六～七七ページ)つまり「商品が比較されるところのどの基準についてみても、基準それ自身が一定の期間に還流する資本の使用によって生産されねばならぬ。」(Letter to McCulloch; 25 Jan. 1821, 中野正訳「リカードオのマカロックへの手紙」一六七ページ)そして「金銀も他の一切の商品と同じく、一にこれを生産し、かつこれを市場にもたらすに必要な労働量に比例してのみ価値を有する。」(vol. I, p. 325, 小泉訳(下) 九一ページ)ということである。

(4) 拙稿「リカードウ価値尺度論の一考察」経済論究(九大大学院)第六号所収。マルサスは価値尺度と利潤の問題を解決しえず、金は「資本なし」で生産されるものと結論するに至った。マルサスもリカードウと同様に、価値の尺度と交換媒介物をもって貨幣であるといひながら、その内容は全く異なるのである。

またこのことから当然いいうることは、貴金属の価値は他のすべての諸商品と同様に、変動恒ないということである。貴金属(金)に対する社会的需要如何によって、如何なる品位の鉱山まで採掘されるかが決定され、その点で金の価値(自然価値)が定まるのである。

さらに、リカードウが貨幣をもって価値実体を有するものであることを強調する他の側面がある。価値は変動断え間ないものであるが、その変動が激しいものであれば、取引上の「契約」において多大の不公平をもたらす。また「財産」としても、できるだけ長期間にわたって、価値変化の少ないものであることが望ましく、価値実体あるものでなければ、価値保存・保留にたえることができないということである。彼はいう。「変動して恒なき媒介物は、すべての契約に影響を及ぼすのであるからして、それに伴う諸弊害は、一々それを指摘するまでもなく、明白であります。貴金属

が最初一般的媒介物として、推奨された根拠は、その価値の不变であるという点にあったのであります。」(vol. III, p. 236. 小畑茂夫訳「リカードの貨幣銀行論集」一八〇一九ページ) しかしながら「かかる状態(地金及び貨幣の価値が、それぞれの水準から背離すること——引用者)は、しばしば避け難いといえ、それ以前のすべての契約に影響するので不都合である。」(vol. IV, p. 57. 小畑訳二六九ページ)「貨幣を所有している人が、その財産の価値下落に伴うあらゆる諸の不都合をこうむる以上、彼はまた当然にその騰貴に伴う利益をも享受せしめらるべきである。」(vol. IV, p. 64. 小畑訳二七八ページ)

(5) 貨幣の価値を契約という視点から問題にすることは、貨幣の支払手段機能が考えられていることであり、貨幣を一つの財産として重視することは、貨幣の蓄蔵機能の考慮を物語っているのである。これらの機能が、このようにインプリシットに認められていることは事実であるが、それがどれだけ明確な意識のもとに展開されているかという点になると問題がある(後述)。

リカードウの一般的交換媒介物に対する理解は、それ自ら価値実体を有するものであるということと(ここでは未だ金属貨幣を想定し、紙幣は論じない)、更に自己以外のすべての商品と同時に対峙しているということにある。ところで、商品の転態は貨幣を通してなされるのであって、「金が一般的交換媒介物たるかぎり、これに対する需要は、決して一個の選択事項ではなくて、常に必須の事項である。」(vol. I, p. 194. 小泉訳(上)二〇〇ページ)したがって、商品転態と貨幣量の問題は自ら明らかとなる。いわゆる貨幣の流通必要量規定がこれであって、よく引用されるところであるが、もっとも明確に表現されている箇所を『経済的にして安全なる通貨』から一つだけ引用しておこう。「金属貨幣を使用する特定国において、諸々の支払いを行なうのに、貨幣として使用される金属の量、また、もし紙幣が部分的、もしくは全部的に使用されているならば、紙幣が代用される金属の量は、次の三つに依存しなければならない。第一は金

属の価値、第二はなさるべき支払の額または価値、そして第三は、それらの支払いがなされる際の節約の程度である。

「金がその本位として使用されている国は、銀が使用されている際に、銀が必要である量の十五分の一の金量が必要とするであろう。……したがって、もし一国が本位として統一的に同じ金属を用いるならば、必要な貨幣量はその金属の価値に逆比例するであろう。」(vol. IV, pp. 55~56, 小畑訳二六六~二六七ページ)

彼は『諸原理』第二十七章「通貨及び銀行を論ず」において、そこではただ通貨数量と価値を支配する一般法則を概説するのみに前置きして、「一国において使用せらるべき貨幣量は、その価値に依存せざるをえぬ。」(vol. I, p. 352, 小泉訳(下)九一ページ)といい、さきの必要量規定を展開している。ここで商品流通量と流通貨幣量の関係について、いずれがこの運動のイニシアティブをとるかということが問題となるが、リカードウ解釈としても、商品流通・商品の価格変動の側にそのイニシアティブがあるものと解されなければならない。そういう意味において貨幣の運動は本来従属的位置を与えられているものである。

三

価値尺度論が貨幣流通必要量法則の展開を可能にし、この必要量の規定は当然に蓄蔵貨幣の問題を提起する。この基本線が、リカードウによってどれほどまで明確な形で展開されているかという点になると、幾らか疑問点が残るのである。

岡橋教授は「リカードは過剰貨幣の吸収機構としての蓄蔵についてはほとんど説くところがない。」それは、資本主義勃興期にあって、新産金に満足せず、廉価な代用貨幣を創造し、信用貨幣による蓄蔵貨幣の代償機能が果され、「リ

カードにとって重要な関心事は貨幣の流通量の問題であつた。」といわれる。この事は事実として否定すべくもないが、それでも尚、当然問題とすべき（事実、場所によっては問題にしているのであるが）点が曖昧な形で残されているという事は、彼の貨幣規定に何らかの吟味を加える余地が残されているものとみることが出来る。

(1) 岡橋保「リカード貨幣論の性格」経済学研究第三卷第三・四合併号九八ページ。

古典学派経済学は富生産の發展と分配をその研究目的とした。スミスはいうに及ばず、マルサスも「富の増大に影響を及ぼす諸原因を研究する」(Principles of Political Economy. II ed. p. 21, 吉田訳(上)三九ページ)ことをその目的としている。リカードウについては、いうまでもなく「土地生産物」の三階級への分配の法則を決定することであつた。そして、農業偏重の価値論から、より一般的な、完全な価値論への移行は、『穀物の低価格の資本利潤への影響に関する試論』(一八一五年刊)を契機となされたのである(P. Straff's Introduction; Works, vol. I, p. xxx et seq. Esp. p. xxxiii)。『諸原理』第二〇章「価値と富……」では、価値と富との区別が、スミス、セイへの批判を通して、するどく展開されている。リカードウは土地生産物(富)の分配を研究目的とし、価値の分析をその基盤にすえたのは、交換比率を決定するものが価値であるからである。つまり富の分配の法則を交換の法則——価値の法則を通して分析しようとするのである。

われわれは、まず富(商品)の転態(交換)とその交換媒介物(貨幣)との関連をその中心として検討を重ねよう。それは彼が、商品の転態と貨幣の介在をどれだけ内在的に把握していたのか、換言すれば「交換の媒介物」という表現の中にどのような意味を付与していたのかということの検討である。

リカードウは商品交換について次のようにいっている。「金が一般的交換媒介物であるかぎり、これに対する需要は

決して一つの選択事項ではなくて、常に必須の事項である。」(vol. I, p. 194, 小泉訳(上)二〇〇ページ)もし商品の転態が必ず貨幣との交換を通してのみ行なわなければならない(事実この通りであり、リカードウの言葉もその事を意味しているのであるが)、商品の転態と貨幣量との関係は、後者が前者に従属するという形で、極めてシビアーに出てこなければならない。その関係というのは前節で展開した流通必要量法則である。

貨幣の流通必要量法則は、何も、その必要量と一国における貨幣(金)存在量との一致を意味せず、両者の不一致——その過不足を問題とするのである。貨幣が不足する場合はどうか。リカードウによれば、金の商品に対する相対価値が増大するというプロセスを経ながら、外国から金が流入してこなければならない。しかし外国からの金輸入は単純に行なわれるものではなく、当該国における一般商品の価格が低いことが必要である。何故ならば金も一個の価値物であって、何も商品価格の高い(金の相対価値が低い)国へ無理に流入する必然性はないからである。彼が「穀物及び一切の国産商品は、貴金属の流入なくしてはその価格の大きい高められることがない」(vol. I, p. 168, 小泉訳(上)一七一ページ。傍点は原文イタリック体)といっているのはこの意味である。また紙幣によってこの貨幣不足を補なおうとしても、これは終局的に問題を解決するものではない。何故ならば、そのことによって金の価値は変化せず、むしろ紙幣の価値を左右するものが金の価値であるからである。その上、紙幣の増発は物価騰貴を結果し、金の流入に対して阻止的要因として働くからである。

他方、貨幣が必要量以上に存在する場合にはどうなるのか。当然蓄蔵貨幣として理解されるべきところであるが、リカードウはいう。「貨幣流通額は決して溢れるほどに豊富となることはあり得ない」(vol. I, p. 352, 小泉訳(下)九一ページ)と。この言葉に対して、セント・クレアは、リカードウの「書き損なう」(O. St. Clair; A. Kay to Ricardo, London,

1957, p. 304) といっているが、問題はそれほど単純なものとは解されないのであって、われわれはかかる主張の論拠を考察しよう。

リカードウは貨幣の「蓄積」をインプリシットに認めている。例えば、外国貿易によって貨幣（地金）が流入してきした場合、また新産金等、これらを一時貨幣の「蓄積」として表現し、短期間ではあるが、一定の期間はその国にとって「過剰」であるといっている。⁽²⁾ ただ間もなく、これが流通過程へ吸収され、通貨の余剰 (surplus, abundance) は生じないというのである。その際貨幣はその自然価値から離れて、流通過程で別個の価値を受取ることになるのであるが、その場合にも、貨幣はその自然価値を消失してしまっているのではない。彼が流通過程に吸収された貨幣に対して、その地金価値（自然価値）を判断基準として、過剰 (excess) かどうかということを問題にしているのは、その現れである。⁽³⁾ つまり貨幣は流通過程に吸収されるので余剰はなくなるのであるが、貨幣（金）がその自然価値から背離する状態にあつては、その自然価値（＝自然水準）に照して貨幣の過剰を意味している。

(2)

(1) 「ブドウ酒の代りに貨幣が与えられ、ついにこの国における貨幣の蓄積、外国におけるその減少が、二国におけるラシヤの相対価値の上に作用して、それを輸出することが有利でなくなるに至らしめてはじめてやむであろう。……ラシヤの相対価格は、イギリスで貨幣蓄積のために騰貴するであろう。」(vol. I, pp. 137~138 小泉訳(上)一三六ページ)(2)「……諸国間における貴金属の新しい分配……。わが国の低廉なる商品は、穀物及び金と交換に輸出せられて、金の蓄積がその価値を下落せしめ、諸商品の貨幣価格を騰貴せしめるに至つてはじめてやむであろう。」(vol. I, p. 418, footnote, 小泉訳(下)一六七ページ(注)) (3)「(金貨や銀貨の隠されていた巨大な宝庫が発見された場合の例ー引用者) 貨幣の過剰 (abundance) が感ぜられるのは銀行がその発行を行なっている期間、そしてそれらが価格に影響を及ぼしている期間だけである、しかもその間利子率は自然的水準以下となるであろう。」(vol. III, p. 91, 小畑訳八二ページ)

われわれは、リカードウが貨幣の蓄積を完全に否定してしまつてしているとみることはできない。貨幣の蓄積保蔵の事実を事実

として充分認めているのである。収入の一部を追加資本に廻すこと、貯蓄の一部を資本へ転形することの論述もしばはみられる。これはただ資本への転化の一時的経過点ともみられるが、「死蔵」(hoard, hoarding)及び「金持階級」(monied class)という場合には、流通過程に対立するものとして論じられている。例えば次の如くいつている。「右の中の第一の原因(英國の通貨の額が少なかったこと——引用者)と、当時憶病なる人々が死蔵の目的で流通場裡から巨額の金貨を抽出した結果とよりして、この期間中、外國の金でしか我がニー金貨に鑄造せられた……」(vol. III, p. 172, 小畑訳一四八〜一四九ページ)彼は、その時その社会が必要とする金量以上に金が存在することは、事実として充分認めているのであるが、金が流通過程より遊離することはあっても、その金は社会的富の絶対的存立形態であるという認識はない。それが地金という商品である以上、流通過程に対して全く対立するものとしてではなく、流通過程へ這入るものとなっている。それ故、これが流通内にある貨幣金の価値に影響を与えるものと考えられ、この両者の相互關係が、彼の必要量規定の外延を曖昧にしている。さきに我々は、彼が「契約」ないし「財産」という視点より、貨幣が価値実体であるものの一論拠としてゐることをみた。そこでも、財産という時には、むしろ商品金という認識が強く、流通の外にあるプールとして積極的意義は与えられていないのである。彼はいう。「如何なる國民といえども、その価値を貨幣に實現する目的で、穀物その他の商品を作るのではない。」(vol. III, p. 108, 小畑訳一〇三ページ)なお後注(5)参照。

(3) 拙稿「リカードウ貨幣論における価値規定」経済学研究第二十七卷第三号、五六〜五九ページ。金の自然価値からの背離を通じての、産金業への反作用は後にみるであらう。

それでは、リカードウは、そのように暗黙の内に認めている過剰な貨幣が、どうして流通過程へ吸収されると説くのであろうか。その論拠は二つ考えられる。第一には、貨幣はただ所有しているだけでは何らの収益をもたらさぬものであり、「再び交換されることによってのみ収益をもたらすもの」(vol. III, p. 108, 小畑訳一〇三ページ)という考えである。後にもみるように、彼にとって貨幣形態での保有は富の保有を意味せず、貨幣はできるだけ早急に資本として投入さるべきものである。つまり自己目的としての貨幣保蔵は極力排斥さるべきものである。

第二には次のような論拠によるのである。金は「一般的交換媒介物」という属性を与えられているのであるから、前節にもみたように、すべての商品と同時に対峙しているのである。リカードウはこの意味の「一般性」は充分認識していた。ところで、社会的に一時不必要な過剰なる貨幣は、地金形態にしろ、鑄貨形態にしろ、一商品として価値を具有しており、その価値量によって、いつでも動きうる可能性をもっている。このように、金はすべての商品と、いついかなる時でも、あらゆる場所において交換（購買）できるものであり、それが貨幣である。いついかなる時でも、あらゆる場所でも、商品を購買できるということは、現在は流通過程から引き上げて、貯蓄、退蔵し、必要な時に、これを流通に投じうることを意味している。この点をリカードウは、交換の一般的媒介物であり、商品一般を代表するものであるから、受取りを拒絶できないものと考える。そしてすべての商品と同時に対峙した位置にある金商品の所持それ自体、市場への供給であり、流通過程にあるものと考える。それは次のような形で説明されている。「もしそれ（隠されていた金貨又は銀貨の量——これを新産金と同視する——引用者）が巨額のものであるならば、銀行またはその宝物の所有者は、銀行券または貨幣を四パーセントの利率で、否恐らくは三パーセント以上の利率で、貸付けることはできないであろう。しかしながら、一旦貸付けられた後は、その銀行券および貨幣は、使用されずに、借手の手許に留まっているようなこととはないであろう。それは各市場にもち出されて、到るところで、諸商品の価格を騰貴せしめ、結局一般流通内に吸収されてしまうであろう。銀行の過剰が感ぜられるのは、銀行がそれらの発行を行なっている期間、そしてそれらが価格に影響を及ぼしている期間だけである。しかもその間利子は、自然的水準以下となるであろう。しかし銀行券または貨幣の付加額が流通内に吸収されてしまうや否や、利率は、銀行券が増発される以前と同じ高さとなり、かつ新貸付は、以前と同じ熱心さをもって、要求されるであろう。」（vol. III, p. 91, 小畑訳八一—八二ページ）「銀行が貸付しようと思

えば、借手は常に存在するので、彼等の貸出超過には、……限界がない。」(vol.III, p.17, 小畑訳六ページ) また地金が一般的交換媒介物である限り、これに対する需要は必須の事であり、したがって商品との交換では、これの收受を強制されるという表現 (vol.I, pp.194~195, 小泉訳(十)二〇ページ)もこのことを意味しているのである。⁽⁵⁾

- (4) 彼が価値尺度について、その商品を *the generality of commodities* と呼んでいるのは、このことと解される。(vol.IV, p.389)

(5) 貨幣の流通手段及び支払手段にもとずく流通必要量は、いうまでもなく、商品の転態に必要な貨幣量であつて、この法則の主導性は商品側にある。そして貨幣量における変動は、流通手段または支払手段としての貨幣の機能から生ずるのではなく、価値尺度としての貨幣の機能から生ずるのである。リカードウは、彼が暗に認めている必要量以上の貨幣を、任意に流通場裡へ投じうるものと考えているのであれば、これはリカードウの誤りである。貨幣への需要があるということは、それ自体何らかの商品流通があるからであつて、改めて流通過程へ這入った貨幣はすでに必要量であり、貨幣はひとりでに流通過程へ吸収されるのではない。貨幣に対する需要がなければ、「借手は常に存在する」ことにはならないのである。

必要量以外に蓄蔵貨幣が予備として存在するからこそ、流通水路は氾濫することはないのであつて、蓄蔵貨幣は流通の否定であり、必要量とは全く対立する概念である。リカードウには、そういう厳密な意味での蓄蔵貨幣は存在しないのである。彼は次のようにいつている。「銀行券は商業が必要とするよりもヨリ多く発行されない、という抗弁は何等の意義をも有していないのである、なんとすれば、かかる目的(商業—引用者)のために要求される額は無制限であるから。商業は飽くことを知らないのである。すなわち、同一部分の商業は、流通媒介物の一千万も、また一億をも使用しうるのである。その媒介物の数量は全くその価値に依存する、もし鉱山の生産力が十倍になつたならば、以前と同じだけの商業が(以前の)十倍の貨幣を使用するであらう。」(vol.III, p.215, 小畑訳二〇六ページ) 社会によって要求される貨幣量が無限であるということは、人間の慾望が無限であると同様に、全き抽象性においてのみ肯認されうる言葉である。しかし現実の過程では——与えられた時点では所与であつて、それは有限な貨幣量である。ここにリカードウにおける貨幣規定の曖昧さと、必要量規定の曖昧さがある。

右のようにして流通過程へ吸収されるのであるから、必要量の変化と物価変動の意味も理解できるであろう。「もし資本が減少したならば、生産物の総額も減少するであろう。そしてもし生産物の流通のために、これまで必要であった貨幣が依然として同額であるならば、貨幣の財貨に対する比率は、以前よりもヨリ大となるであろう。したがって諸商品が騰貴するであろうことが期待されるのである。しかし、われわれは、一国の貨幣の総量は、その価値によって規制される、ということを忘れてはならない。」(vol. IV, p.244, 小畑訳二四一ページ)資本、生産物が減少すれば、流通媒介物の必要量も減少すべきことは当然である。ところで、現実の貨幣存在量が依然として変らなければ、それらは需要の増大となつてあらわれる。彼によれば、その不必要な流通媒介物(金)は流通から消え去つて退蔵されるのではなく、市場にとつては、貨幣の供給(有効需要)としてあらわれる。しかしこの需要増大のため、物価が騰貴しても、その物価騰貴は何も商品、貨幣双方にとつて、その自然価値の変動の結果ではない。自然価値は双方とも不変のままであり、商品にとつては、市場価格の自然価格からの背離である。貨幣については、その自然価値から背離して、流通過程で受取る相対価値の変化(この例では減少)である。ここでもやはり貨幣の必要量は、その変化した貨幣の価値によって規制されるというのであるが、その際、必要量以上の貨幣(地金)が貨幣の相対価値に影響することになるのである。リカードウが「貨幣に対する需要は、全くその価値によって左右され、その価値はその数量によって左右される」と⁽⁶⁾いっているのは、このことを指しているのである。

(9) vol. I, p.193. 小泉訳(上)一九八ページ。マルクスはこの言葉のある『諸原理』第十三章(金に対する租税)を「もっとも混乱せる一章」ときめつけて、この文章を引例し、「この流通媒介物の数量は、この説明にとつては全く重要なものではない。というのは、低い価値で多くの金属が流通しようと、高い価値で少量の金属が流通しようと問題ではないのだから。」(K. Marx: Grundriss der Kritik der politischen Ökonomie, Dietz Verlag 1953, S.776.)と云つてゐる。蓄蔵貨幣を認めた

マルクスにとっては、この文章は全く自己矛盾と解されざるをえないものである。村岡氏はこの文章に対して、「金の貨幣としての特殊性に起因するその需要の弾力性がゼロに等しい」ことの表現といわれる。(村岡俊三「リカード貨幣論に関する一試論」経済学研究第二四卷第二号八十一ページ)

貨幣は一般的交換媒介物であって、流通過程でその自然価値から離れた価値を受取る(それは一定 quantity と交換される商品量によってしまる)のであるが、なお、自ら自然価値を有する一商品である。だから、この両者のギャップの内に金自体の運動がはじまる。さきの引用に続けて、リカードウは次のようにいつている。「したがって貨幣の価値は、右の場合、減少するであろうから、それは他国の貨幣に対して相対的に過剰となり、したがってその過剰部分は輸出されるであろう。……もし一国の商業が増加すれば、すなわち、もし貯蓄によって商業資本を増加することができらば、かかる国は、流通媒介物の付加額を必要とするであろう。しかし如何なる事情のもとにおいても、通貨はその地金価値(貨幣の自然価値——引用者)を維持すべきである。これがわれわれがよってもって通貨の過剰を認識する唯一の確実なる試金石である。」(Vol. III, p. 244, 小畑訳二四一〜二四二ページ)これを彼の金生産部門について述べるならば、金でつくられた貨幣は、偶然的の一時の変動をこうむりながら、諸商品と同様に永続的自然的変動をも免れえないということのうちに現われる。需要供給にもとづく市場価格の変動の影響をうけながらも、商品の価値は結局その生産費(自然価値)に収斂するというのが、商品金をも含めての、リカードウの命題である。

なお、ここでの問題に関連して、セント・クレアの「金に対する租税」についての解釈に一言ふれておきたい。彼は金への租税は、金を流通過程から政府のもとへ吸収し、将来の飢饉や予期せざる戦争のための「金の蓄蔵」を形成するものと想定している。そして政府のもとへ吸収されただけ quantity が減少し、金価値が騰貴するものと解している。(St. Clair: A Key to Ricardo, pp. 316〜317) しかしこの解釈には賛成することはできない。確かにリカードウは、金へ

の租税によって、金はその所有者から国王のもとへ移されると述べているが(vol. I, p. 139, 小泉訳(上)二〇五ページ)、これが金の蓄蔵を形成するものとみることとはできない。金に対する租税に限らず、租税は国家のもとに帰属する。その際リカードウによれば、租税額だけ商品の価格が騰貴し、それは最終消費者によって支払われるのである。このように物価騰貴した場合、ヨリ大なる貨幣量が必要になることが当然予想されるのであるが、この点に関してリカードウの説明は次の通りである。「私は、商品の価格が生産の困難によらず、課税によつて高められた場合には果して同一量の商品を流通せしむるにヨリ多くの貨幣を要すべきや否やを疑うものである。…(生産物数量は一定と前提する——引用者)……公衆は実際十一分の一だけ消費を少なくし、そしてこの分量は政府の消費するところとなるであろう。これを購入するに必要な貨幣は、租税の形で農業者から収納せらるべき、毎クオター八シリリングから得らるるであろう。しかし、徴課せられた金額は、同時に、彼等とその穀物に対して支払われるであろう。故にこの税は事実上一個の実物税であつて、今まで以上の貨幣の用いられることを少しも必要ならしめぬか、もし多少必要ならしめても、その数量はこれを無視して差支えない程に僅少なものである。」(vol. I, pp. 213~214 footnote, 小泉訳(上)二二二~二二三ページ(注)。cf., vol. IV, pp. 320~322) つまり、租税として政府の掌中に這入った貨幣は、政府の手を通して、ただちに市場に流出してくるのであつて、何も政府のもとにおいて蓄蔵貨幣となるのではない。これがリカードウの真意である。

四

貨幣は特殊の商品であるから、一般商品と全く異なる、一つの流通法則を受取るのである。彼が貨幣としての機能を価値尺度機能、一般的交換媒介物においてみたことは、簡単ながら頭初みたとおりであるが、なお彼は貨幣の特質とし

て、流通媒介物、耐久的非消費財という点を指摘する。これらは価値尺度、一般的交換媒介物という彼の貨幣規定から全く独立してなされているものではないが、ここでは、これらの貨幣規定のもとにおいて、労働価値説にもとづく彼の貨幣価値論が、どのように考えられているのか、この点が考察されなければならない。

(A) たびたび述べたように、リカードの交換媒介物は価値実体具有一商品であるが、ところによっては、それが文字どおり交換の単なる「媒介物」として論述されている。例えば次のようにいつている。(1)「金及び銀が流通の一般的媒介物に選ばれているので、これらの金属は、商業上の競争により、かかる金属が全く存在せずして、諸国間の貿易が純然たる物々交換であった場合に行なわるはずの、自然的取引に適應するような割合において、世界各国の間に分配されるのである。」(vol. I, p. 137, 小泉訳(上)一三五ページ)(2)「すべての取引は事実上物々取引であり、そしてもし貨幣が何らかの法律により、輸出しうる商品の価格を引上げるが如くに分配され、又は蓄積されうらなれば、それは又輸入商品の価格をも引上げるであろう。したがって貨幣が高い価値をもとうと、低い価値をもとうと、それは外国貿易に影響を及ぼさないであろう。」(vol. II, pp. 146-147, 吉田訳(上)三二六ページ)(3)「生産物は常に生産物または勤労によって購買されるものであって、貨幣は単に交換を行なう媒介物たるにすぎない。」(vol. I, pp. 291-292, 小泉訳(下)二五ページ) これらをもって、リカードの交換論の基本的性格は、貨幣無用の物々交換論であるといふことはできない。これは人間の存在、社会の存立が物質的再生産過程であること、換言すれば、 $W-W$ は商品交換 $W-G-W$ の質料的内容であることを意味しているのである。

ところで次の文章は彼の貨幣論の一側面を伝えている。彼は一国民がいかなる商品に対しても、少しも欲望をもたなくなるような事態はあり得ないと説いたのち、次のようにいう。「如何なる国民といえども、その価値を貨幣に実現す

る、目的で、穀物、その他の商品を作るのではない、⁽¹⁾ なんとすれば、かくの如きは、およそ人間の労働が費される諸々の目的の中で、最も不利益な目的であるから。貨幣は、それが再び交換されるまでは、一国の富に対して何ものも附加しない。したがってこのことから知られるように、貨幣額の増加は、個々人が任意に行ない得るところでないと同様に、いずれの国といえども、勝手にそれを行なうことはできない。その国と貿易する国における貨幣の価値が、相対的に小さい結果として、はじめて彼等は貨幣を取得することができるのである。……その数量の増加した通貨が、最初の通貨が有していたよりもヨリ大なる真実価値をもつようなことはないであらう。」(vol. III, pp. 108-109, 小畑訳 一〇三-一〇四ページ)

彼によれば、貨幣は富の一形態ではなくて、単に富の移転を手助けする媒介物にすぎず、再交換によって、富をもたらすことをその本来の使命とするものである。この意味では、金生産労働はもはや社会にとって「不利益な労働」、つまり社会的空費と考えられるのである。したがって「貨幣にいたっては、いかなる国もその増加を希望せず、また増加する必要なき一商品である。通貨二千万ポンドを使用しても、一千万ポンドを使用すること以上に、何らの利益もないのである。」(vol. I, p. 194, 小泉訳(上)一九九-二〇〇ページ)

(1) 「その価値を貨幣に実現するために商品を作るのではない」という言葉は、いわゆる重商主義と全く対立するものである。この点彼の重商主義に対する批判をみると、この体系は外国競争の禁止によって、資本を強いてその自然に赴かぬ筈の水路に流入せしむることによって、結局は全商品の生産高を減少せしめるといのである(vol. I, p. 316, 小泉訳(下)五二ページ)。われわれのここでの問題に関連しては積極的に展開されていないのであるが、彼は国際的自由競争によって、各国における商品の自然価格をできるだけ引き下げることを望んでいる。

貨幣は交換媒介物——流通手段であり、したがってその為の費用は社会的流通空費であるというこの考えは、別の論

点——貨幣は価値物でなければならぬということ、矛盾するものかどうか。貨幣は流通空費であるから、それは無価値な物で代用されることが可能である。⁽²⁾「社会公衆を本位金属そのものが蒙むる變動以外には如何なる通貨の価値變動をも蒙むることなからしめ、かつ同時に最も出費少なき媒介物をもって流通を行なわしめることは、通貨としてその達しうべき最も完全なる状態に到達せしめる所以である。」(vol. I, pp. 356~357, 小泉訳(下) 九五~九六ページ)彼は政策論として「完全なる通貨」を推しすすめるのであるが、その内容は、一国の通貨が全部紙幣によって代替されること、その紙幣の価値がその代表金量の価値に一致していることを意味している。ところでわれわれに関連する問題は、その紙幣の価値及び紙幣の流通法則である。彼は紙幣の流通法則が全く独立的に存立しうるものとは考えておらず、その根底には金属流通を考えているのである。次のようにいっている。「イギリス、またいかなる国も、紙幣を地金の代りに貨幣として代用することができようが、そのような紙幣の価値は、紙幣が全然存在しなかった場合に流通した筈の、地金価値(=自然価値——引用者)の鑄貨量によって規制されねばならない。」(vol. III, p. 224, 小畑訳二一六~二一七ページ)「紙で造った貨幣は、容易にその数量を減じうるものであるから、その本位は金であっても、その(紙幣の——引用者)価値は、かりにその金属が通貨の極めて小なる一部分を成すにすぎずして、貨幣に対して極めて軽微なる関係を有するにすぎなかった場合に、金属そのものの価値が増進するのと同様の速度をもって増進するであらう。」(vol. I, p. 194, 小泉訳(上)一九九ページ)

彼は一国のみを想定し、すべての通貨が紙幣によって置き換えられうるものと考え、またそれを望んだのであるが、その場合、貨幣としての金は全く消去されてしまっているのではない。紙幣は本来無価値であって、価値尺度機能を営み得ず、それ自体では流通必要貨幣(紙幣)量を確定することはできない。紙幣の価値はその代表金量の価値によっ

て決定されるのであり、そのために彼は、その価値の安全を目的として、地金による兌換を推奨したのである。他方、金が価値尺度機能を営なむためには、その金がすべての流通過程を満たす必要はなく、その社会の一部に流通ないし存在しておれば充分である。したがって貨幣が価値尺度機能を営なむ商品として、価値実体を具有すべきであるというところと、貨幣は流通媒介物、社会的流通空費であるから、全く無価値なる紙幣によって代替できるということとは矛盾しない。リカードウが流通媒介物という視点より、紙幣流通を説いたとしても、それは貨幣（金）の自然価値による価値尺度論、流通必要貨幣量規定を否定するものではない。彼が紙幣の数量規制を説いているところは、右の理論構造の上にたって論じられるべきものである。

(2) リカードウは、無価値なる紙幣が何故に流通しうるのかという点の積極的展開はしていない。むしろ現に紙幣・銀行券が流通しているという事実的認識の上にたって、その量的拡大の限界如何ということをその考察対象としたといわなければならぬ。

貨幣は流通空費であるから、そのための費用——産金業への資本投下は、できるだけ削減した方が、社会についてむしろ利益であるという思想が生ずるのである。しかし産金業からの資本の撤回はただ任意的になされるものではなく、利潤量の大小をその判断基準としてなされるのである。この産金業への資本投下をできるだけ削減することを希望して、彼は、一方では代用貨幣（紙幣）の拡大を、他方では金に対する租税を考慮している。

金に対して課税がなされると金の価値が騰貴するが、そのために産金量が比較的に減少しても（彼は生産費増大と数量の減少は相伴なうものと考えている）、商品流通にとっては何らの支障もないのである。というのは、金価値が騰貴しているために、流通必要金量は少なくてすむからである。もともとリカードウにとって、貨幣は富ではなく、産金業への投下資本量が不要となれば、その資本は金以外のヨリ生産的（彼はこの言葉を物質的ないし価値の再生産にたずさ

わる労働についてのみ使う)な産業部門に投下する方が社会にとっての利益であるという。その方が、総価値量として減少していても、ヨリ富裕となっているからである。彼はこの点次のようにいつている。「金の価値はその生産費増加の結果たる、量の減少に比例してのみ増加すべきものである……その(産金国における金に対する課税——引用者)利益は、もしも金の生産されることが少なくなれば、その生産に使用される資本も少なくなるであろうし、従来ヨリ大なる資本の使用によって得られたと同一なる商品の価値が、ヨリ少ない資本の使用をもって、ヨーロッパ(非産金国)から輸入されるであろうということである。したがって、鉱山から撤回せられた資本の使用によって得らる一切の生産物こそは、すなわちスペイン(産金国)が租税の賦課によって受け、また凡ての他の如何なる商品の独占によっても、あれ程に豊富、あれほどに確実には得られないであろうところの一利益たるものである。」(vol. I, pp. 195~196, 小泉訳(上)二〇一ページ)⁽⁴⁾

(3) リカードウによれば商品の価値はその商品に対する課税のために騰貴するが、その価値変化は単に相対価値ではなくて、自然価値の変化を意味している (vol. I, p. 195, 小泉訳(上)二〇〇ページ)。この課税↓価値変化は彼の価値論の不徹底の問題である。課税は生産物からの控除であって、何等投下労働量の増加を意味せず、彼の労働価値説からみても、課税↓自然価値増大を説くことはできない筈である。彼がこのような主張をなす根拠は次の通りである。課税されただけ生産費は増加し、価格は騰貴するが、そのために商品に対する需要が減退すれば、資本はその生産部門から逃避する。また課税後も従来通りの需要があり、前通りの生産が継続されうものであれば、課税——利潤減少ではなくて、その生産部門でもひき続き社会的平均利潤率が与えられていることを意味している。そしてその課税額だけ生産費に加算された価格で販売され、生産が継続されるのであれば、その商品はそれだけ生産費↓自然価値が増大したことになるのである。

(4) 「金に対する租税」について、なお簡単に次の三点を指摘しておきたい。(一)リカードウによれば、金への課税は結果的には好ましきものであるが、ただ無条件に認容されているものではない。産金国はただ一国に限らず、他の産金国を考えた場合に

は、当然金価値の問題が錯綜してくる。彼はいう。「スペイン〔産金国〕国王は、金銀鉱山の領有を独り専らにするものではない。また仮りにそうであつたとしても、彼が鉱山領有と課税権とから受けるところの利益は、大小何れかの程度における紙幣の普遍的代用の結果として、ヨーロッパ〔非産金国〕における〔金に対する〕需要と消費とが制限せらるるために、余程削減されるであらう。」(vol. I, p. 196, 小泉訳(上)二〇一―二〇二ページ) (二)金に対する租税を薦める反面、これが如何なる階級に利害關係を有するかが問題となるが、この点彼は次のようにいう。「貨幣として使用せらるるその部分については、多額の租税は収納されながら、何人もこれを支払う者はないであらう。これは貨幣に特有なる一の性質である。」(vol. I, p. 194, 小泉訳(上)一九九ページ)この言葉については後述(一〇八ページ参照)。(三)金に対する租税は新産金に限られたものではない。「金に対する租税には二種類ある。一は流通する金の現在量に課せらるるもの、今一つは、鉱山からの年々の産出量に課せらるるものである。両者はともに金の分量を減じて、その価値を騰貴せしめる傾向を有する。」(vol. I, pp. 199~200, 小泉訳(上)二〇五―二〇六ページ)

右のように、貨幣は流通媒介物・社会的流通空費であるとして、紙幣による代用、産金業への資本投下の抑制を説くのであるが、これらの展開の底流にあるものは、産金業への資本の移動を媒介項としながら、金価値はその生産費(＝自然価値)によって規定されるということである。これはリカードウ貨幣論の出発点であり、その基本的命題であつた。

(B) 耐久的非消費財が貨幣の特質であるという指摘について。

リカードウによれば、生産物はいずれもその需要を見出し、長期にわたって過剰であることはない。⁽⁵⁾「一国の生産物はみな消費されるものであることは、理解しておかねばならぬ」(vol. I, p. 151 footnote, 小泉訳(上)一五二ページ(注))という。しかしその生産物の供給が「引続き久しく人類の慾望に丁度適合する程度の豊富さをもって供給されるものは存在せず、したがって価格の偶発的一時的変動を蒙むらないものはないのである。」(ibid, p. 88, 小泉訳(上)八〇ページ)その

ような一時的な価格変動を通して、資本の移動が行なわれ、その供給が必要に一致した時に、その価格は自然価格に一致したことになるのである。その市場価格が自然価格に一致する過程が長いか短かいかは、その商品の供給条件如何による。彼の言葉によれば「商品の性質及びその数量を減少せしむることの難易いかん」(vol. I, p. 191, p. 196, 小泉訳(上)一九六、二〇二ページ)によるのである。ところで大部分の商品は年々消費され、かつ再生産されるものであるから、比較的短期間にその供給を需要に適合させることができる。したがって長期間にわたって、その自然価格から乖離していることはない。しかしながら、「金、家屋、労働その他の物について」⁽⁶⁾は事情は異なると説く(vol. I, p. 196, 小泉訳(上)二〇二ページ)。それらは供給数量の増減が困難だからである。

- (5) この点については一口にはいえないが、次の労作を参照。羽鳥卓也「リカードにおける資本蓄積と恐慌」商学論集第二八卷三号所収。

- (6) 彼は「金、家屋、労働並びに幾多の物」については、自然価格＝市場価格命題において他の諸商品と異なると指摘しているが、両者の間にどれだけの明確な差別がなされているかは疑問である。私見では、この指摘は単に、生産の増減が迅速になされないというだけであって、時間的遅速のみを問題にしているとみる。したがって、これらの商品と他の諸商品との間に、理論的に特に一線を劃して、別個の取扱かいがなされているとはみない。「並びに幾多のもの」と極めて曖昧な表現を使っているのはこの為であろう。

家屋の市場価格をどのように理解しているかは明瞭ではないが、家屋に対する租税はこれを付加家賃としているので、家賃とも解される。彼は次のようにいう。「家屋は、徐々にはあるが、しかし確実に消耗するものであり、そして建築者の利潤が普通水準に回復せらるるまでは新たに家屋は建築せられぬであろうから、建物賃料は、ある期間の後はその自然価格に回復されるであろう。」(vol. I, p. 203, 小泉訳(上)二〇九ページ)

労働力(人口)の問題については、彼はやはりマルサスの徒であった。マルサスのように単純ではなく、「労働が任意に増

減すべからざる「商品」であることも充分知っており、また労働への需要の内容についても、種々問題を含んでいるが、なおマルサス人口論から脱皮しているとはいい難い。ただここでの問題に関連しているならば、人口の受動的適応は短時日のうちになされるものではなく、その時間的長期性が、ここでの例外としての取扱いの原因と考えられる。

商品としての金が、一定の資本と労働力によってその生産が増減されるものであることはいうまでもない。「貨幣として」の金についてどう考えられているのか、以下検討するところである。

彼は、一般商品に対する需要は、各人に購買の資力があれば、その商品に対する慾望によって決まり、「貨幣に対する需要は全くその価値によって左右され、その価値はその数量によって左右される」とのべた後、次のように述べている。「金という金属は、他の一切商品と同様に、究極その生産の比較的難易によって、その市場価値の左右せらるるものである。そして金はその耐久的性質のため及びその量を減少せしむることの困難のため、その市場価値は容易く變動に従うものではないけれども、しかもこの困難は、金が貨幣として使用せられているという事情のために、大いに増しているのである。」(vol. I, p. 193~194, 小泉訳(上)一九八〜一九九ページ)

前半の説明は、商品としての金にとっての当然の事柄であるが、後半の「貨幣として」使用されているからということは、過去の産金量が消費されてしまうことなく、流通過程に滞留していることを意味している。⁽⁷⁾金以外の富は究極のところ消費されるが、貨幣は消費されずに年次残存するというのが、リカードウの基底にある考えである。もし新産金を含めての全金量が必要金量に合致すれば、金は新産金の自然価値をもって流通することになるのであるが、貨幣が非消費財であるということが、金量とその必要量との合致を一層困難にしているというのである。そしてその不一致なる場合にも、前節で述べたような過程を経て、流通過程を充たそうとするのであるから、この非消費財であるということ、金がその自然価値から乖離した相対価値を受取ることを一層強める要因となる。

(7) 市場価格の変動を媒介項としながら、新しき自然価格（自然価値）水準が形成されていくのであるが、リカードウのその価値概念は、極めて動態的であり、すぐれている。それは次の一文にみるができる。「(新しい機械の発明、熟練度の進歩等によって——引用者) 諸商品総量の価値は減少するであろう、というのは、改良の結果増加した生産物量の価値は、何等の改良が行なわれなかった場合に生産せられた筈の、それより少ない数量の価値と正しく同一である訳であるが、影響は、その財の中の改良の未だ行なわれぬ以前に製造されて、未だ消費せられずにいる部分にも及ばされるからである。」(vol. I, p. 274, 小泉訳(下)八ページ)

右のような私見は、彼の「金に対する租税」についての説明にみる事ができる。彼の租税論は、租税額だけ生産費（＝価値）を高め、その完成商品の最終消費者がこれを支払うというのがその骨子であるが、彼は金に対する租税について次の如くいつている。「もし金が或る一国にのみ産し、そして万国みなこれを貨幣に用いるのであったならば、余程の重税をこれに課しても、しかもその金を工業上並びに器具用に使用する程度に比例しての外は、何れの国にも負担が加えられぬ、ということがおこりうる。貨幣として使用せらるるその部分については、多額の租税は収納されながら、何人もこれを支払う者はないであろう。これは貨幣に特有なる一の性質である。」(vol. I, p. 194, 小泉訳(上)一九九ページ) 彼が租税は最終消費者によって支払われるという論拠は、原生産物ないし中間生産物に対する租税はこれを転嫁できるという点にある。しかしながら、貨幣を所有しても、それは次の購買の為に所有するのであって、リカードウにあっては、自己目的としての蓄蔵貨幣は一応考えられていないのであるから、貨幣には最終消費者はいないのである。貨幣が半永久的に市場を流通する限り、まず誰もがこれに対して租税を納めるが、他に転嫁することによって、結局何人もその租税を支払わぬことになる（結果的には、価格標準が事実上切下げられたことになる）。彼が「これは貨幣に特有なる一性質」といったのは、この流通過程に半永久的に滞留するものとしての、その媒介物について述べたものである。

貨幣は耐久的非消費財であるために、その自然価値から背離した市場価値は、自然価値の変動に従うこと、自然価値へ復帰することが困難であるというのであるが、両者の関係はどう考えられているのであろうか。その市場価値は自然価値を離れたままでありうるのか。リカードウの結論は、あくまでもその合致がヨリ「困難」であり、一般商品よりも長期間を要するということであつて、決して不可能といっているのではない。むしろ一定の期間の後、自然価値へ落着くものと考えている。彼は先の引用に続けて、次のことを説明している。もしも工業用に使われている金量が多大であれば、その分量は年々消費されるので、その価値増減は比較的容易に顕現してくるものであるが、金が貨幣として使用されている場合には、それがヨリ長期間（彼の例示では十年）を要するということである。そこでは前後の関係よりヨリ長期性を示すような設例がなされているのであろうが、彼は他の箇所では短期間の内に自然価値に復帰するような衝動を有するものとみている。「金鑄貨が流通において通用している現在価値は強制価値である。ところで、その自然価値はその強制価値を越えること十五パーセントであるが、その法則を廢し、それが抑さえられている強制力を取払い、そしてただちにその自然価値を回復するであらう。」⁽⁸⁾ (vol. III, p. 40)

(8) 平瀬巴之吉氏は、リカードウ体系は価値＝価格であるといわれるが、その論拠は、資本の移動を媒介項としながらも、究極的には市場価格＝自然価格を主張して点にある（平瀬巴之吉「経済学の古典と近代」三七五ページ）。しかしリカードウ自身もいつているように、市場価格が自然価格から乖離している点が問題であり、また前述の通り、貨幣はその自然価値から離れうるといっているのであるから（商品について両者の背離がある以上、その裏面として当然貨幣側においても背離しているである）、この意味において価値＝価格ではないのである。

(C) 次は、貨幣を独占的商品とみることであるが、彼は「金に対する租税」論において金は「一個の独占的商品であるから、その自然価値を超過することがある。そしてその場合には、それはこの超過額に等しい地代を納めるであ

る。」(vol. I, pp. 197~198, 小泉訳(上)二〇三ページ)といっている。

堀経夫博士は、リカードウの貨幣論に対して、この文章に依らず、「労働価値説を棄てて需要供給説を採った」(堀経夫「理論経済学の成立」一九〇ページ)として、次の如く説明される。「恐らく彼は貨幣(鑄貨)をもって一種の人為的独占財と看做し、従つてその価値については需要供給説(数量説)を適用することとしたのであらう。彼が国家による鑄貨鑄造権の独占の場合に数量説を適用しているのは、この間の消息を物語るものでなければならぬ。」(同書一九〇ページ)と。

確かにリカードウは独占価格が生産費によつて全く左右されず、購買者の需要によつて決まることを述べているが、彼は、「如何なる工夫をもつてもその数量を増すことのできぬ場合、したがつて競争が全然一方——買手の間——に行なわれる場合にのみ、独占価格にある。」(vol. I, pp. 249~250, 小泉訳(上)二六三~二六四ページ)といっている。そしてその例として特殊なブドウ酒や美術品をあげているのである。彼は『諸原理』冒頭において、このような稀少性にもとづく商品があることを認めながらも、これらを一応考察の外におくとし、「人間の努力によつてその数量を増し得べく、かつその生産上に競争の制限なく作用するが如き商品のみ」(vol. I, p. 12, 小泉訳(上)一五ページ)を考察の対象とすることを述べている。したがつて、彼のいう市場価格論(『諸原理』第四章)は独占価格とは全く異なり、人為的に増減できる商品にとつて、その生産量にマッチしない場合における一時的偶然的価格である。そしてそれら商品には必ず自然価格が成立、前提されていなければならない。金もこの種の商品——人為的に増減できる商品——として把握されていることは改めて述べるまでもないであらう。

それでもなお、金は独占的商品でありえ、自然価値以上の超過額(＝地代)をうるといふが、これはどう理解すべき

であろうか。『原生産物以外の諸商品に対する租税』の中で彼は次のようにいつている。「實際一國の穀物並びに原生産物は、一時的に、独占価格で売れることがある。しかしそれが永久的に独占価格で売れるのは、最早資本を有利に土地に投ずることが出来ぬようになり、またしたがってその生産物を増加せしむることが出来なくなった場合に限るのである。」(vol.I, pp.250~251, 小泉訳(上)二六五ページ)土地生産物の価格は最劣等地において決まり、その地では地代は納めないが、資本投下を増すことによってその生産物数量を増加させることができるので、元来独占価格では売れないのである。それが一時独占価格をとりうるのは、生産量増加に自然的制約が作用するため、供給制限が起るからである。その場合の超過額は利潤ではなく地代と考えている。もし利潤とすれば他の産業部門より資本の導入があるからである。「かかる時には、耕作せらるる土地のあらゆる部分、土地に投ぜられた資本のあらゆる部分が、もつとも収益の差額に應じて大小の差異はあるけれども、兎に角地代を生ずるであろう。」(vol.I, p.251, 小泉訳(上)二六五ページ)そしてその独占価格は購買者が支払いうる最高の価格であるから、それ以上に価格を高めようとすれば、もはや需要が減退して、価格は自然価格に戻らなければならない。いづれにしても、そのような独占価格は長期的ではあり得ず、一時的であり、自然価格を回復する。彼が金という土地生産物に、一時的独占価格を認めているのは、右のような理由によるのである。貨幣(金)は確かに特殊の商品であるが、その価値は一般的商品と同様な法則によって決定される。それ故にこそ貨幣は価値尺度機能をいとなむことができるのである。そして貨幣の特殊性は、商品の価値変化も自らのうちに表現しなければならず、また商品の転態を自己の流通量において表示しなければならぬというその運動法則のうちにあらわれるのである。

五

われわれは、リカードウにおける貨幣論展開の過程として、価値尺度——貨幣流通必要量法則の把握を簡単にみ、彼の「一般的」交換「媒介物」の内容を吟味した。また貨幣論の展開のうちに労働価値説がどう貫かれているかを、幾つかの論点をあげて考察してきた。リカードウの貨幣論が数量説に根ざすものであれば、彼にとって、金の自然価値（＝絶対価値）を問題にする必要はなかったし、産金業についても、資本の導入・撤回を問題とする必要は何処にも存在しなかった筈である。確かに彼の「相対価値」概念（彼はすぐれて相対価値論者である）は、相互比例的な展開にもとづいているが、それは絶対価値＝真実価値の消失のもとに論じられているのではない。丁度市場価格が自然価格を基礎とし、前者が基本的には後者の水準によって決定されるように。その自然価値は、それ自身全く無媒介的に決定されるものではなくて、市場価格の変動を通してなされるのである。金生産にどれだけの資本及び労働が投ぜられるか（それによって金の自然価格は決定される）は、金に対する社会的需要及び供給をメルクマールとしてなされるのであって、全く恣意的になされるものではない。それが資本による生産の現実的な過程である。リカードウにとってはこの金の市場価格（相対価値）が問題だったのである。

もし彼が数量説貨幣論を展開したのであれば、死の直前まで価値尺度の問題について悩まされることはなかったであろう。死の数週間前に書かれた遺稿「絶対価値及び交換価値」は、極めてすぐれた平均労働概念（vol.IV, pp.381～382）にもとづく価値尺度論であった。これはマルサスにおける、価値尺度論の事実上の放棄、したがって貨幣理論の滅失と

充分考えあわせるべきであろう。

それでは、彼は何故最後まで、貨幣は価値実体あるものでなければならぬと主張したのであろうか。それは、現に貨幣は、国内的にも国際的にも、価値実体ある貴金屬であり、この貴金屬生産自体が一定量の資本と労働の投下を必要とする、資本制生産の一環の中にあるという事実的認識にある。また彼は商品の分析を、人間の労働によって増減できる商品のみをその分析対象とするということで始めたのであるが、我々が価値尺度を問題にしうるのは、商品が相互に共通な一者に還元でき、その共通者は、商品がすべて労働の結果であるということ、したがって、これが商品の真実価値、相対価値の尺度であるということにある(*cf.* vol. I, p. 284, 小泉訳(下)一八ページ)。この基本的認識を貨幣の第一規定者とし、この上に立ってその上部的説明として、数量的契機を持込んだところに、リカードウ貨幣論の一つの基軸点がある。

彼は政策論としては、「完全なる通貨」(すべての通貨が紙幣から成り、その価値がその代表金量の価値に等しい通貨)を希望し、産金部門への資本投下をできるだけ削減して、その資本を他のより生産的な(富の生産にとって)部門へ投下することを説いたのであるが、それはただペーパー・マネを主張したのではなく、その背後には金屬流通を想定し、前者は後者によって規制されることをみておいたのである。地金兌換を推奨したのはこの点に求められる。

他方、彼は富(使用価値)の増大、分配を強く念頭におくあまり、貨幣をただ商品の交換媒介物と強調する側面があるが、それは「一般的」交換媒介物の一般性の強調の裏面でもある。商品は、その価値を貨幣に実現するために生産されるのではないといひ、一国における貨幣の過度累積を危険視するのである。商品は貨幣への転化をその目的としないという言葉は、社会の物質的再生産を $W \rightarrow W$ という質料的内容において、とらえる範囲では正しい(彼の「生産的」と

いう用語はこう視点からなされている)。しかしこのことから、彼にとって金生産は富の生産ではなく、したがって価値生産的ではないということになるのである。貨幣の過度増大・集積を危惧するのは、それ自体価値生産でないということ、そういう意味で不生産的であるということ、更にまた、これが物価騰貴をもたらし、生産の「自然的」順調な発展を阻害するという主張にあったのである。このことは、彼がわざわざ産金部門を商品生産の一環として位置づけたことを、否定するような論拠さえ与えることになっている。労働価値説にもとづく貨幣法則の展開と数量説的貨幣論が、踵を接して論じられているのは、この点のあらわれとみななければならない。